

# 天然林の鳥・人工林の鳥

藤 巻 裕 蔵

## はじめに

害虫の大発生は、混交林より単純林でおこりやすいことはよく知られている。これは、混交林では動物相が豊富で、それぞれの動物がクモの網の目のように複雑に関連しあっているので、特定の種類がとびぬけて多くならないからだと説明されている。しかし、これは一般的な説明で、このようなことを森林保護に役立てていこうとすれば、もっと具体的に明らかにしなければならないことがたくさんある。

森林にすむ鳥類には、林業上有害な昆虫、ノネズミのような害獣の天敵となっているものが多く、生物相互の関係を考える場合に鳥類の役割は重要である。このようなことを明らかにする第一歩として、ここではこれまでの調査で得た資料をもとに、旭川の針広混交の天然林とトドマツ人工林の鳥類を比較し、どのような林に多くの鳥類がすめるかを述べたい。

## 鳥のすみ場所の条件

われわれ人間の生活には「衣・食・住」を欠くことができない。人間以外の動物たちはどうであろうか。人間とちがって生まれつき「衣」を身につけているから、必要なのは「食住」である。鳥にとっても同じことで、すみ場所に食物をさがしたり、かくれたり、巣をつくったりする場所が十分そなわっていなければならない。このような点で、どんな鳥が、どんなすみ場所を必要とするか、ということから話を進めてみよう。

## 鳥の採餌場所

鳥は種類によってなにを食べるか決っている。したがってどのような場所で食物をさがすかも決っているわけである。例えばツバメは空を飛びながら、飛んでいる虫を食べる。ウは海にもぐって魚を捕えるといったぐあいである。森林には多くの鳥がすんでいるが、森林の中ならどこでもかまわず食物をさがすかという、そうではなく、やはり場所が大体決っている。図-1は、食物を葉の間でさがす鳥、樹幹でさがす鳥、やぶの中でさがす鳥など、それぞれ代表的なものをえらんでかいたものである。キクイタダキやヒガラはほとんど針葉樹の葉の間をとびまわって虫をさがす。ゴジュウカラやアカゲラは樹幹をぐるぐる走りまわって食物をさがす。シジュウカラはおもに広葉樹の樹冠部で食物をさがすが、秋に葉が落ちると地上にもよくおりる。ヘンソンハシブトガラはおもに針葉樹や広葉樹の枝で食物をさがす。アオジはササやぶや灌木のしげみの中で、アカハラはおもに地上で食物をさがす。アカハラやアオジは夏鳥といって北海道には夏の間だけいる種類である。図-1に示したその他の鳥は、留鳥で、一年中北海道にいる種類である。

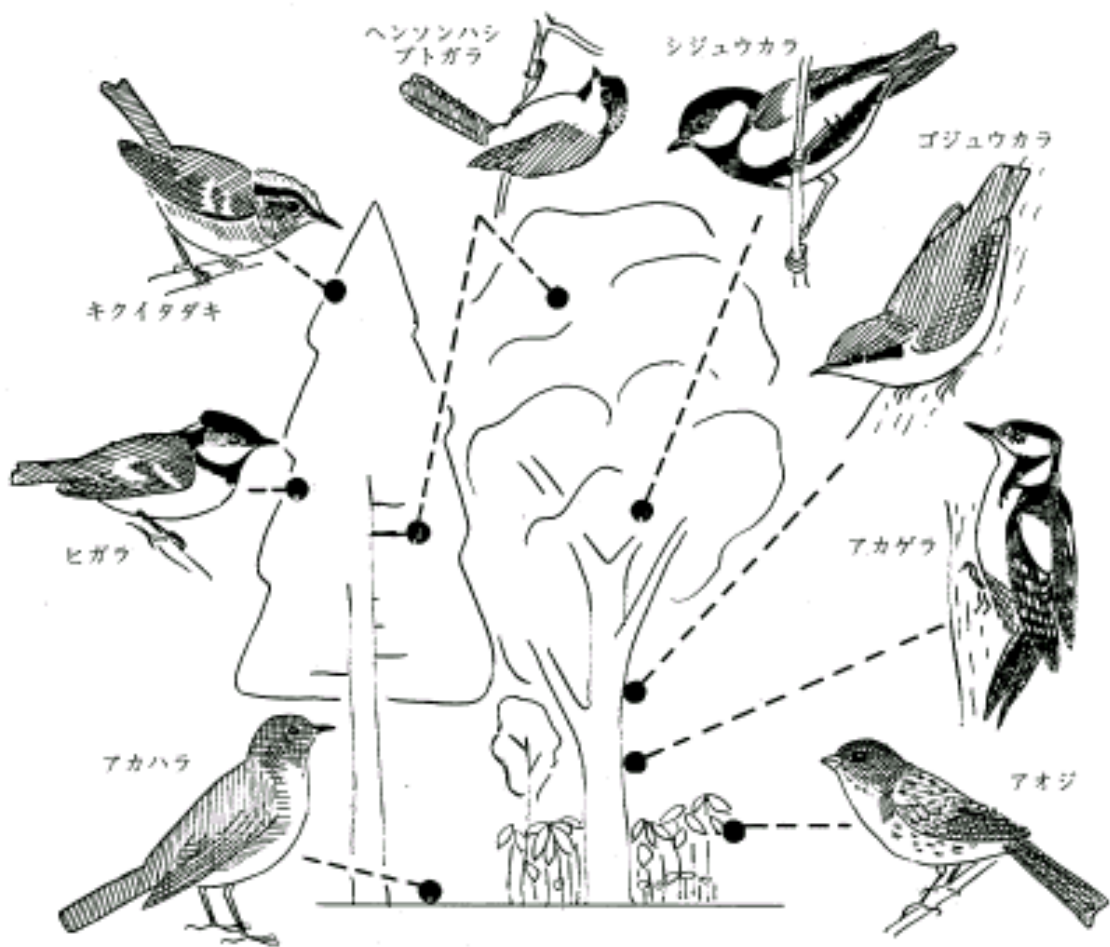


図-1 森林の鳥類のおもな採餌場所

このように、森林の雨は、地上からやぶ、樹幹、枝、葉と全ての部分が、いろいろの鳥類に利用されているわけである。

### 鳥が巣をつくる場所

巣箱をかけると、よくスズメ、ムクドリ、シジュウカラがその中に巣をつくる。しかしアオジやウグイスは絶体に巣箱を利用しない。巣箱を利用する鳥類は、自然条件では樹洞などの穴に巣をつくる種類である。このように、巣をつくる場所も種類によってきまっている。また巣の形や材料も同じようにきまっている。

森林にすむ鳥類が巣をつくる場所は、樹洞、樹枝上、草またはやぶの中、地上の4つに大別できる。アカゲラやゴゲラなどのキツツキ類、シジュウカラ、ヘンソンハシブトガラ、ヒガラ、ゴジュウカラは樹洞に巣をつくる。キツツキ類は生木や枯木に自分で穴をうがって巣をつくるが、ゴジュウカラやシジュウカラ類はキツツキ類の古巣、自然にできた樹洞、幹のさげ目などに巣をつくる。樹枝に巣をつくる種類にはウソ、エナガ、キクイタダキ、アカハラ、キ



図 - 2 森林の鳥類のおもな営巣場所

- 1 . 樹洞に巣をつくる (コゲラ)    2 . 樹枝に巣をつくる (アカハラ)    3 . やぶの  
 中に巣をつくる (ウグイス)    4 . 地上に巣をつくる (センダイム クイ)

ジバトなどがある。巣の型はさまざまで、ウソやアカハラのような椀型、エナガのような袋型、キジバトのような皿型などがある。アオジ、ウグイスはやぶの中にそれぞれ球型、椀型の巣をつくる。またエゾライチョウ、コルリ、センダイムシクイは地上に巣をつくる。

巣をつくる場所についても、採餌場所の場合と同じように、種類によって使う場所が決っている。

### どのような森林に鳥が多いか

鳥類に必要な「食住」という考え方にもとずいて、それぞれの鳥がどのような場所で食物をとり、巣をつくるかについて述べた。それぞれの鳥が利用する採餌場所、営巣場所の種類が多いほど、より多くの種類の鳥がすめることになるわけである。

天然林と人工林とでは鳥類が利用できる場所がどの程度ちがうであろうか。これまで調べてきた旭川の針広混交の天然林、トドマツ人工林の例で説明してみる。まず幼齢人工林の場合から検討してみよう。幼齢林では高さ 3m くらいのトドマツ (10 年生) とササなどの丈の低い植物があるだけで、高木はなく、ササ原のような景観である (図 - 3 - 1、写真 - 1)。このよう

な所では、アオジ、ホオジロ、ウグイスなどのように、やぶの中で食物をさがしたり巣をつく

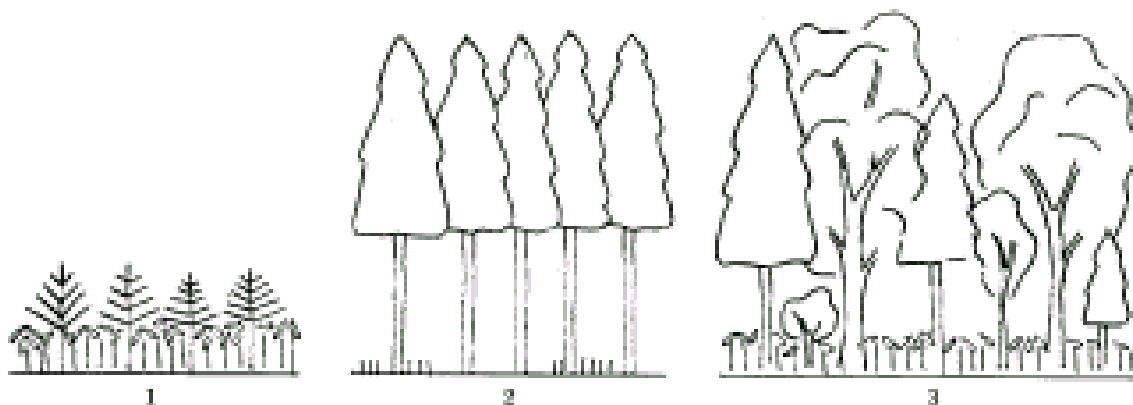


図 - 3 幼齡人工林 (1)、壯齡人工林 (2)、天然林 (3) の模式図

る鳥しかすめない。冬には、積雪上に造林木の先端がわずかにでているだけの状態で、とても鳥のすめる環境ではない(写真-2)。



写真-1 夏の幼齡人工林 (手前) と壯齡人工林

次に壯齡人工林についてみると、高木はあるが、トドマツ (30 - 40 年生) だけで、樹冠部がうっ閉しているため林床植物が少ない(図-3-2)。このような所では、キクイタダキやヒガラのように

もっぱら針葉樹で食物をさがす鳥は多いが、キツツキ類、ゴジュウカラ、シジュウカラ、エナガのようにおもに広葉樹で食物をさがす鳥、アオジ、ウグイスのようにやぶを好む鳥はあまり多くない。



写真 - 2 冬の幼齡人工林（左）、壯齡人工林（中）、天然林（右）

天然林では針広混交で、高木もかん木もあり、林床植物も多い（図 - 3 - 3）。また老齡木も多く、巣をつくるのに適した樹洞も多い。ここでは針葉樹、広葉樹、やぶで食物をさがす鳥、樹洞、枝、やぶに巣をつくる鳥と多くの鳥がすんでいる。

以上に述べたことは、数字をあげて比べてみると、もっとはっきりする。

4～8月は、北海道に一年中生息している留鳥のほか、夏だけ北海道にやってくる夏鳥が加わるため、一年中でもっとも鳥の多い時期である。この間にみられる種類数は、図 - 4 に示すように、天然林ではもっとも多く52種、壯齡林では40種、幼齡林では13種である。図のそれぞれの円のかさなっている部分の数字は、それぞれの林分で共通にみられる種類数を示している。これをみると、壯齡林、幼齡林でみられるほとんど全ての鳥は天然林でもみられることがわかる。

12～3月は、夏鳥が南に去って留鳥だけとなる。冬だけ北海道にやってくる冬鳥もいるが、これは非常に少ない。したがって、この時期は一年中でもっとも鳥の少ないときである。このようなときでも、図 - 4 に示すように、天然林では17種もの鳥がみられるが、幼齡林になるとわずか3種である。

いままでのべた種類数は、数の多い種類も少ない種類も、一度でもみられたものがあげられている。次に、いつでもよくみられる主要なものだけをあげてみよう。表 - 1 に示すように、天然林では19種、壯齡林では9種、幼齡林では3種である。とくに、冬の幼齡林では0になってしまう。営巣場所についてみると、樹洞や樹枝上に巣をつくる鳥は壯齡林では少なくなり、幼齡林ではまったくいない。また、やぶや地上に巣をつくる鳥も壯、幼齡林では少なくなる。

以上にのべたことから、鳥が多く生息できる森林としては、いろいろの種類の木、とくに針葉樹と広葉樹がまざっていること、高木低木といろいろの高さの木があること、ササなどのや

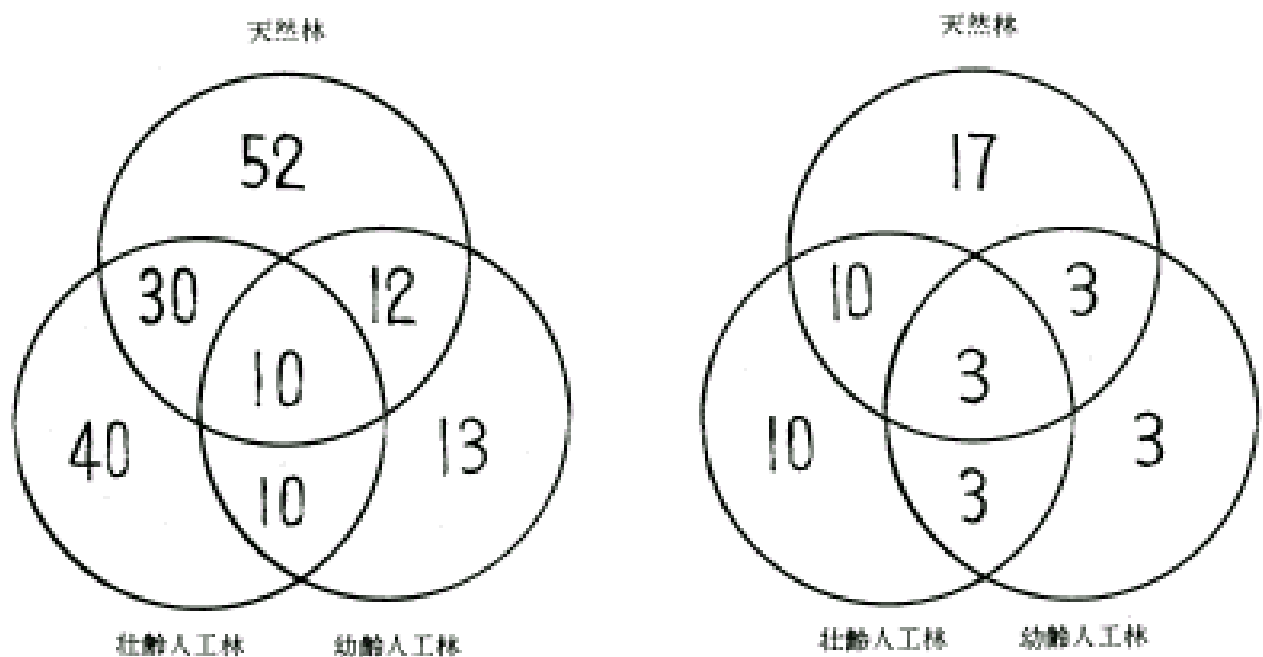


図 - 4 幼齡人工林、壯齡人工林、天然林でみられる鳥の種類数  
夏（左）、冬（右）

ぶがあることなどが重要であることがわかる。このほかにも、いくつか必要な条件があるが、主要なのは上にのべたことである。

最近、野生鳥獣の保護ということがよく話題となる。保護ということはもちろん、有害動物の駆除もふくめ、野生動物の生息数を適当に保つことは大切である。そのためには、上に述べた鳥類にかぎらず他の動物についても、どのような種類がどのような場所にどのくらい生息しているか、さらにそれらの動物がおたがいどのように関連しあっているのか、ということをも明らかにすることが、今後ますます重要となってくるであろう。

(昆虫野兎風科)

表 1 天然林、壮齡林、幼齡林のおもな鳥類とその営巣習性

樹洞 樹枝 地上またはやぶ

		天然林	壮齡林	幼齡林
留 鳥	ウ			
	ゴ			
	シ			
	ヘン			
	ソ			
	カ			
	ラ			
	ラ			
	ヒ			
	エ			
夏 鳥	ア			
	ホ			
	キ			
	エ			
	セ			
	ウ			
	ヤ			
	ア			
	コ			
	オ			
ジ				
ロ				
キ				
イ				
ク				
イ				
ス				
メ				
ラ				
リ				
		19	9	3

